

[評者]
大塚篤司
京都大学特定准教授・
外胚葉性疾患創薬医学兼
皮膚科学



ジェネラリスト必携! この皮膚疾患のこの発疹

宮地良樹, 安部正敏 編

●A5 頁 256 2019年4月
定価: 本体 4,000 円+税
[ISBN978-4-260-03680-1]医学書院刊

ジェネラリスト必携! この皮膚疾患にこの処方

安部正敏, 宮地良樹 編

●A5 頁 256 2019年3月
定価: 本体 4,000 円+税
[ISBN978-4-260-03681-8]医学書院刊

私が京大皮膚科に入局を決めたのは、当時主任教授であった宮地良樹先生の影響が大きい、というより、宮地先生と面談をして「京大で働こう」と思った。宮地先生の皮膚科学と皮膚科診療に対する圧倒的な情熱に感動し、京都から松本に帰る特急電車で悩むことなく決断した。宮地先生はとにかく話がお上手、日本全国をまわり、どんなテーマでも一流の講演をされる。併せて、本屋には「宮地良樹先生コーナー」ができるほど沢山の教科書を編集されている。ここまでたくさん本を出されるには、もちろん理由があるはず。

「先生、どうやってこんなに教科書をつくっているんですか？」

書籍を量産するテクニックをこっそり伝授していただこう。そういう魂胆の私に、宮地先生の答えはシンプルだった。

「いろんな学会や講演会に参加して勉強しているからだよ」

いやはや、聞いた自分が恥ずかしくなった。皮膚科を何十年も愛し、貪欲に勉強してきた当然の結果が数々の「宮地本(みやちぼん、宮地先生が書いた本たちの俗称)」という当たり前のことを私はまざまざと思い知らされた。

研修医のころから、私は宮地チルドレンとして「宮地本」のほぼすべてに目を通して、ありがたいことにいくつかは分担執筆させてもらっている。その

200冊を超える「宮地本」の中で、『ジェネラリスト必携! この皮膚疾患のこの発疹』と『ジェネラリスト必携! この皮膚疾患にこの処方』の2冊は間違いなく最高傑作だと断言する。各項目をおなじみの有名専門家が担当し、難しい専門知識をジェネラリストに向けてわかりやすく解説している。「粟粒大の淡紅色紅斑がびまん性に散在」などと皮膚科医にしか通用しない解説だけが乱暴に並んでいる教科書とはわけが違い、「これでもか」と臨床写真が掲載されている。そして、視覚的に理解を助ける図も多い。皮膚科医の私にとっては眺めているだけで楽しい、そんな教科書になっている。

さて、個人的には、巻頭に掲載されている宮地先生と群馬大時代の宮地チルドレンである安部正敏先生の対談が最高に面白い。京大時代の宮地チルドレンの私としては、宮地先生の知識を十二分に引き出した安部先生に軽く嫉妬を覚えるほどの充実した内容であった。これはぜひ、皮膚科の先生も皮膚科以外の先生も、実際に本を手にとって読んでいただきたい。私が「京大皮膚科に入局したい!」と思った十数年前の当時の気持ちを共有していただけるのではないかと期待している。2冊の本をパラパラとめくりながら、あのとき、京大皮膚科に即断した私を褒めてあげたいと思った。超えることができない師匠をもった私はとても幸せな皮膚科医だと思う。